

# 和歌山県沿岸の戦争遺跡と現状について

山 根 惇 史\*

The war ruins and current situation in the coast of Wakayama Prefecture

Atsushi YAMANE

## 要 旨

本稿では、和歌山県沿岸の紀中地区および紀南地区に遺る自然に埋もれ忘れ去られつつある戦争遺跡を中心に調査を行った成果を報告するものである。測量調査では比較的誤差の少ないレーザー距離計を用いた。

調査結果をもとに、それぞれの戦争遺跡にどの程度遺構が遺っているかわかるように簡単な分布地図である遺跡概略図を作成した。

調査結果から、戦後74年を経ても遺構が遺る遺跡が多いことが判明した。また戦争遺跡のおかれてい  
る現状と文化財としての戦争遺跡の保存と活用の難しさがわかり、調査結果を活字として後世に残す重要性を再確認した。

キーワード：戦争遺跡、戦跡、和歌山県、紀伊半島、旧日本軍

## I はじめに

和歌山県沿岸は、南部（以下、紀南）が太平洋に面しており紀伊水道の入り口となることから、戦略上重要な地域であった。特に岬と浜辺の多い北部（以下、紀北）から中部（以下、紀中）は敵揚陸艦が上陸予想すると予想された地点であり、また海岸線上空を敵航空機が飛行し京阪神地域への空襲を行うことが予想されていたため紀中と紀南地域を中心に対空、対艦レーダー基地などの防衛拠点が設置され敵航空機および敵艦の探索にあたった。しかし、終戦に伴い多くの防衛拠点は放棄され、あるところは開発によって跡形もなく消え、あるところは一部の痕跡が戦争遺跡として残存しているという状況である。

こうしたなか、当時極秘基地であったことから地域の住民であっても遺跡の存在が認知されず、戦後の農地化・再開発に伴い多くの遺跡が破壊された今日ではわずかに残る史料と当時を知る一部の住民の記憶が頼りという状況である。遺跡の存在が忘れ去られてしまう前に少しでも多くの情報を記録し後世へ残すことが急務である。

令和元年9月19日受理 \*文学研究科文化財史科学専攻 研究生

## Ⅱ 和歌山県沿岸の戦争遺跡分布について

和歌山県の戦争遺跡は特定の地域に集中している。大きく分けて現和歌山市を中心とする紀北、由良町から御坊市を中心とする紀中、田辺市以南の紀南である(図1)。

紀北では、現和歌山市北部を中心に旧日本陸軍の砲台が築かれた。場所は図1中の紀北枠にある×印付近である。これらは加太砲台や友ヶ島砲台として有名であり観光地化されているので本稿での詳細な説明は省略する。

紀中は、由良町に旧日本海軍紀伊防備隊を主とする軍港があったため沿岸部を中心に多数の関連施設があった。由良町内に関しては、文献史料等も豊富である<sup>1)</sup>。しかしながら美浜町に存在した海軍レーダー施設に関しては進駐軍引渡時の僅かな書類を残すのみである。

紀南は、太平洋に面しているため対空・対艦レーダー基地や砲台が至る所に存在していたとされているが、戦後のリゾート開発に伴い多くの遺跡が破壊された。史料としては、進駐軍引渡時の書類と各町史に記されている程度である。

## Ⅲ 戦争遺跡の調査について

多くの遺跡は、近代の遺跡ではあるが戦争遺跡という特性上山中の奥深くに埋もれてしまっている。今回の調査では、遺跡の近くに山道などが存在する比較的到達しやすい場所を選び、調査するにあたり危険が及ばないように留意した。また調査を行った結果、断片的な情報しか得られなかったか、全く情報を得ることができなかった遺跡に関しては章内に独立した項目を設けずに短い文章で書き留めておくことにした。調査では遺構の写真撮影およびBOSCH製レーザー距離計ZAMO2による簡易的な測量を行った。レーザー距離計を用いることができない遺構などは、歩測を行った。よって数値はおおよその値である。遺跡および遺構の位置情報は携帯電話のGPS機能を用いたため、大きな誤差が生じている可能性が考えられる。したがって、遺跡および遺構の地図は遺跡概略図として扱う。また遺跡概略図の作成には、国土地理院の地理院地図を利用した。遺跡概略図中の遺構名は、戦後の進駐軍引き渡し資料<sup>2)</sup>に含まれる図面を参考にした。

## Ⅳ 紀中地区の戦争遺跡

調査を行った戦争遺跡は、地図上のA地点およびB地点の2か所である(図2)。いずれも日高郡美浜町内に存在する戦争遺跡である。紀中には、この他に由良町内の旧日本海軍関連施設の遺跡が存在するが前述のとおり多くの資料が残されているため調査対象から除外した。

美浜町内には、これら遺跡の他に陸軍が煙樹ヶ浜の背後にある岩山に穴を掘ったとされており<sup>3)</sup>、現地にて確認するとトーチカの銃眼とみられる開口部があったが出入り口なども見当たらないため県道から写真撮影のみ行った(写真1)。また、西山頂上付近にも陸軍の施設があったとされている<sup>4)</sup>が遺構などは見当たらなかった。以下、各遺跡について概観する。

#### A 地点 海軍日ノ御埼防備衛所・特設見張所跡地

遺跡の所在地は、日高郡美浜町日ノ御埼一帯である。紀伊水道に侵入する敵潜水艦の阻止を目的として昭和17年（1942年）9月に開設され、戦後の進駐軍への引き渡し資料によれば電波探信儀と呼ばれる対艦レーダーと潜水艦を探知する二式磁気探知機および九七式中聴音機を配備した水中監視部隊が配備されており、敷地の面積は3,700㎡と広大であった<sup>5)</sup>。日ノ御埼から対岸の徳島県伊島まで水中聴音機の海底ケーブルが敷設され、潜水艦発見時に遠隔操作にて作動する機雷が近隣海域に沈められていたようである<sup>6)</sup>。

調査によって得られたデータをもとに作成した遺跡概略図は（図3）である。遺構は遺跡概略図（図3）の1から5であり、1はコンクリート製の飲料水タンクである。2の兵舎地区は戦後に2代目日ノ御埼灯台用地としてそのまま転用されたが土地の区画として残存している。3の高角砲台跡は八角形のコンクリート製砲床と砲座防護壁が残存している（写真2）。ここには九六式二十五糎単装機銃が据えられていたと考えられるが、後述の初代紀伊日ノ御埼灯台の空襲ではあまり戦果が無かったとされている<sup>7)</sup>。4の電波探信儀跡にはアンテナとレーダー操作室が一体化した回転式施設が存在したようで、現在は約4㎡の半円状窪地が遺る。中央にはマンホールが埋まっているが関連は不明である。5の電機室は約23㎡の窪地として遺る。

#### B 地点 初代紀伊日ノ御埼灯台跡地 機銃掃射弾痕

遺構は、A地点の海軍軍用地よりもやや西側に位置する。初代紀伊日ノ御埼灯台は明治28年（1895年）1月25日に初点灯した。白色円形鉄造の構造で第2等フレネルレンズを備えた大型灯台である。初期のころは石油式ランプを光源としていたが、大正6年9月28日に電化された。しかし昭和20年（1945年）7月21日に米艦載機の機銃掃射を受けレンズ等が大破、点灯不能となる。さらに7月30日、米艦載機の機銃掃射および小型爆弾の投下を受け燃料庫に引火し全焼する<sup>8)</sup>。灯台は戦後解体されて現存しないが灯台および灯台官舎の敷地を囲っていた煉瓦塀が残っている。灯台の敷地は前述の遺跡概略図（図3）中の6と7である。煉瓦塀には今もなお米艦載機の12.7mm機関砲弾による無数の弾痕が刻まれており、戦争の生々しさを今日に伝えている（写真3）。灯台跡地へ向かう本来の道は道路工事によって失われており、今は日ノ御埼の釣り場へ通じる獣道のみとなっている。戦後、灯台敷地（遺跡概略図（図3）の7）は民間の船舶信号所となったため灯台の基礎上に通信室と宿直室が建てられているがこちらも今は廃墟となり崩壊しつつある。全体的に樹木が生い茂り、木の根の侵食によって煉瓦塀が崩れつつあるので今のうちに何らかの対策をたてることがのぞまれる（写真4）。付近で初代紀伊日ノ御埼灯台の存在を知ることができるのは現3代目紀伊日ノ御埼灯台のパネルと元日ノ岬パーク内に存在する第25代灯台長 内田十二の「妻長女三女の千鳥飛んで来よ」という句が刻まれた石碑のみとなっている。美浜町内在住の老夫婦によるとこの句は終戦直後、灯台の復旧に尽くしていたところ流行していた赤痢によって妻と長女、三女を相次いで失った灯台長の想いが刻まれているという。

## V 紀南地区の戦争遺跡

調査を行った戦争遺跡は、地図上のC地点からG地点までの5か所である(図4)。紀南地区は太平洋に面していることもあり、図4を見るとほぼ等間隔に防衛拠点が存在していることがわかる。なおC地点からG地点までの5か所以外にも田辺市に存在した田辺海兵団、白浜町の平草原および椿に存在した陸軍電波警戒機(対空レーダー)陣地、串本町の串本海軍航空隊および同航空隊の高角砲台、海上護衛隊、串本町潮岬の陸軍電波警戒機陣地、陸軍特設警備隊106中隊本部兵舎、イサデ飛行場、海軍通信隊潮岬分遣隊、紀伊大島の海軍軍需部倉庫、樫野埼特設見張所など多数の防衛拠点が存在した。このうち白浜町の平草原には陸軍電波警戒機陣地のものとみられる地下壕が残存している<sup>9)</sup>が山の斜面が急であり滑落の恐れがあったため調査はしていない。また樫野埼特設見張所には紀南地区最大規模の対空レーダー陣地が構築されていたが、跡地は航空自衛隊串本分屯基地となっており調査は困難であった。なお串本町内の一部戦争遺跡に関しては南紀串本観光協会による戦跡ツアーの巡回コースとなっている。以下、各遺跡について概観する。

### C地点 臨海の家軍部隊跡地

遺跡の所在地は、白浜の白良浜より北側、円月島の近くに臨海もしくは番所鼻と呼ばれる小さな岬である。その先端にある番所山を中心に砲台が設置された。所属部隊は海軍防備隊の杉本分遣隊で昭和20年(1945年)3月に京都大学臨海実験所を接収し、塔島および臨海浜の壕内、御船山先端に大砲が設置されたとのことである<sup>10)</sup>。

調査によって作成した遺跡概略図は(図5)である。塔島は進入路が見当たらず御船山は落石により道が寸断されていたため調査をしていない。遺跡概略図(図5)の1の臨海トーチカ・砲台跡は前述の臨海浜の壕内の一部と推定される。トーチカの銃眼は直径約37cmと比較的大きいことから小口径の艦載砲を転用したものが設置されていたと考えられる。(写真5)はトーチカへと繋がる壕の入り口である。また2の番所山高角砲台跡は番所山公園内に位置しており日ノ御埼特設見張所と同じく八角形とみられるコンクリート製砲座防護壁の一部が展望台脇に残存している。(写真6)は高角砲台跡に隣接する展望台から撮影したものである。現在は中心に樹木が植えられている。このほかにも番所山公園を中心としてトーチカとは異なる用途とみられる地下壕の痕跡が散見された。多くは奥行きが無く掘削途中で放棄したか埋められたものと考えられる。

### D地点 瀬戸崎防備衛所跡地

遺跡の所在地は白浜の観光名所、千畳敷南側の本礦谷から三段壁北側の大崎付近までの範囲である。戦後の進駐軍引き渡し資料によれば敷地の面積は17,400㎡、九七式中聴音機と九二式電波鑑査機を装備していた<sup>11)</sup>。潜水艦を探知する水中聴音機の海底ケーブルは3方向に約10km延びていたという。このケーブルは昭和26年(1951年)10月に引き上げられ処分されたとのことである。また岩を削った火薬庫と防空壕が戦後も残っていたようである<sup>12)</sup>。

調査によって作成した遺跡概略図は(図6)である。1の海軍貯水池は今も貯水池として利用

されている。貯水池を案内してくださった方は「海軍ため池」と呼称していた。2の海底ケーブル支持金具は海底ケーブルを岩場に沿いながら兵舎へ引き込んでいたものと推定される（写真7）。3の海軍境界杭は千畳敷から海軍敷地側の崖上を見上げると見ることができる。このほかに同様の境界杭が橋立開門付近にも存在するとされている<sup>13)</sup>。4の地下壕跡は、用途は不明であるが大形の地下壕である。本礦谷から東側のホテル敷地内の斜面に遺る（写真8）。地下壕の壕口付近に有刺鉄線が張られており奥行きなどの規模は不明である。

#### E 地点 市江崎特設見張所跡地

遺跡の所在地は市江崎灯台周辺である。戦後の進駐軍引き渡し資料によれば建物の敷地は400㎡、電波探信儀を2台装備していた<sup>14)</sup>。市江崎特設見張所の電波探信儀は対空用であり紀伊半島を北上する敵航空機の探知が主任務であったと考えられる。近くで農作業をされていた方によると昭和19年（1944年）末に開設された模様である。

調査によって作成した遺跡概略図は（図7）である。1の第2電波探信所跡は約50㎡の部屋と幅約1.5mの通路があり、床面は地表面より約90cm～1.2m下がった部分にある（写真9）。これらから元は地下電波探信儀操作室（以下、地下電探室）だった可能性が高く<sup>15)</sup>、天井部分が崩落したと考えられる。また床面に板状のものが突き出ており引き抜くとベークライト製の穴が多数開口した板が出土した（写真10・11）。裏面には可変抵抗器やロータリースイッチに見られる回り止めの爪を収める穴が軸穴の横に設けられている（写真12の白矢印）ので電波探信儀もしくは無線機の操作パネルの一部と推定される（写真12）。2の兵舎地区は約300㎡の平地になっており井戸跡と瓦、食器片が散乱していた。3の戦闘指揮所跡は直径約15mの窪地になっており、引き渡し史料の青図<sup>16)</sup>によるば地下室となっているので地下室が崩落した跡だと考えられる。4の隧道跡は小型の防空壕とみられるが、ゴミが散乱しており一部崩落しているため深さなどは不明であった。

#### F 地点 江須崎特設見張所跡地

遺跡の所在地はすさみ町である。戦後の進駐軍引き渡し資料によれば敷地は2,400㎡、電波探信儀を2台装備していた<sup>17)</sup>。こちらも市江崎特設見張所と同じく対空用として昭和19年（1944年）11月に開設された<sup>18)</sup>。江須崎特設見張所跡地は他の遺跡と異なり案内パネルが設けられていた（写真13）。

調査によって作成した遺跡概略図は（図8）である。1の兵舎地区は煉瓦造りの水槽と井戸、建物の基礎と壁の一部が残存している。2の隧道跡は防空壕もしくは倉庫跡だと思われるが奥行きが約1.6mと浅く、崩落していると考えられる。3の第2探信所跡は約40㎡の広さであり地表面から約50cm～1m下がっているため地下電探室であった可能性が考えられる。床面には3か所穴が開口しておりアンテナの基礎もしくは配線を通していたと考えられる。4の高角砲台跡は直径約5mの窪地になっており北側の側面には小型弾薬庫とみられる穴が開口している。5の見張所跡は約25㎡の平地であり近くの木には電線もしくは電話線を通していたとみられる電気絶縁用の碍子と固定用の金具がぶらさがっていた。6の高角砲台跡は直径約8.1mの窪地で板状のコン

クリートが放射状に散乱していることから砲座防護壁の残骸と考えられる。また大型の弾薬庫もしくは地下壕跡と考えられる壕口も見える(写真14)。7の第1探信所跡は約39㎡の広さであり地表から約45cm～1.2m下がっているのが地下電探室であった可能性が考えられる(写真15)。また床面に4か所穴が開いており、そのうち1か所の穴には内部に煉瓦製の壁面が遺るので、地下電探室の一部と考えられる(写真16)。

### G地点 潮岬特設見張所跡地

遺跡の所在地は潮岬の望楼の芝生と呼ばれる一帯である。現在は東側が潮岬キャンプ場として運営されている。戦後の進駐軍引き渡し資料によると昭和16年(1941年)12月開設、敷地面積は500㎡、電波探信儀を3台装備していた<sup>19)</sup>。電波探信儀3台のうち2台は対空用、1台は対艦用であった<sup>20)</sup>。潮岬特設見張所と隣接して陸軍電波警戒機、樫野埼特設見張所が設置されていたことを考えると、本州最南端として防衛の最前線であり冗長性を持たせていたと推定される。

調査によって作成した遺跡概略図は(図9)である。1の1号電探跡は三式一号電波探信儀三型が配備されていた<sup>21)</sup>。終戦後、地下電探室は埋め立てられ現在は小さな丘として遺る(写真17)。2の2号電探跡も1と同型の電波探信儀が配備されていた。終戦後に地下電探室が埋め立てられているが1と比較すると他の地表面と比較してごく僅かに盛り上がっている程度である。3の25ミリ機銃陣地跡は直径約8.2mの土塁が遺る。4の海軍望楼跡は煉瓦とコンクリートからなる耐弾構造の見張り小屋であり屋根や一部の壁が崩壊しているものの保存状態は良好である。なお東側の壁を中心に機銃掃射の弾痕が生々しく遺る(写真18)。5の3号電探跡はこの場に配備されていた仮称二号電波探信儀二型の配線を通していたと考えられる穴の開いたコンクリート製の基礎が顔をのぞかせる。

## VI 戦争遺跡の現状と共通の課題

戦争遺跡の現状は、そのほとんどが自然に埋没しつつある状態である。多くの遺跡は、山中に近代の人工物が散財して分布している、という状況である。こうした構造物のうち、煉瓦やコンクリートにて構築されているものはある程度遺ると考えられるが、土塁や素掘りの陣地跡などは風雨によってあるいは落ち葉や枯れ木によって崩れ、埋まっていく状態にある。

また戦争遺跡については、一部の郷土史・戦跡研究者によってある程度調査されていると考えられるが、それらについての史料・資料が外部に公開されることは限りなく少ないのではないかと推定される。事実、戦時中や終戦直後の情報は、市町村史や公文書によって得ることができるが半世紀以上経過した今、どの位置にどの程度の遺構が遺されているかを正確に記した史料・資料は皆無に近い。さらに近代の戦争遺跡は、近世以前の遺跡に比べその学術的価値が軽視され、太平洋戦争などの戦争に関わることから研究対象として敬遠される傾向にある。こうした状況にあって、近代の戦争遺跡を管轄する自治体は、戦争遺跡が機能した当時を知る方々が存命の間に現状を記録する調査を早急に実施することが必要だと考えられる。このままでは、自然にも歴史にも埋もれてしまい、忘れられた存在になってしまうことになるかと推定される。

一方、昨今は近代の建築を中心に文化財の活用が重要になりつつある。その点において、戦争遺跡は活用方法が難しい。たとえば、大規模な砲台跡や弾薬庫があれば友ヶ島のように観光地となりうるし、防空壕は平和教育の教材として活用できる。しかし、本稿で扱った遺跡は観光地にするには遺構の遣りが悪く、機銃掃射の弾痕はあれど僻地ゆえ足を運びにくい。また一般人が立ち入る場所ではないため山道は獣道と化し、倒木や落石、路肩の緩みによる滑落の恐れもある。活用するにはハードルが高いのである。だからこそ正確な測量や発掘調査を行い、調査結果を活字にし広く公開することが重要なのではないだろうか。本報告が、こうした取り組みの一助となれば幸いである。

## Ⅶ おわりに

本稿は、自然に埋もれ忘れ去られていく日の当たらない戦争遺跡を少しでも調査し活字として残したいという考えから始めたものである。調査を行うにつれて、単独での測量調査の難しさを身をもって感じた。しかし、多くの人々に助けられてようやくひとつの区切りとして本稿を書き終えることができた。なお、今回の調査では回ることができず、位置を特定することができなかった遺跡に関しては、今後も調査を継続したいと考えている。今後は測量調査の精度向上を目指しつつ少しでも多くの戦争遺跡を調査・公開、こうした戦争遺跡の保存と活用について研究したいと考える。

## 注

- 1) 由良町誌編集委員会 編 (1995)：『由良町誌 通史編 上巻』由良町 p1055
- 2) 作成者不明 (年不明)：『近畿地区施設一覧 (附青図) (6)』海軍省 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011197600
- 3) 美浜町史編集委員会 編 (1991)：『美浜町史 下巻』美浜町 p332
- 4) 日高町誌編集委員会 編 (1977)：『日高町誌 下巻』日高町 p479
- 5) 高知県室戸警察署長 (1945)：『紀伊防備隊 (2) 施設及軍需品目録 日ノ御埼防備衛所及見張所』海軍省 p0178-p0181 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011206700
- 6) 美浜町史編集委員会 編 (1991)：『美浜町史 下巻』美浜町 p329
- 7) 日高町誌編集委員会 編 (1977)：『日高町誌 下巻』日高町 p121
- 8) 美浜町史編集委員会 編 (1991)：『美浜町史 下巻』美浜町 p933
- 9) 紀州博物館学芸員、玉田伝一郎氏による
- 10) 白浜町誌編さん委員会 編 (1984)：『白浜町誌 本編 下巻一』白浜町 p802
- 11) 高知県室戸警察署長 (1945)『紀伊防備隊 (2) 施設及軍需品目録 日ノ御埼防備衛所及見張所』海軍省 p0183-0184 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011206700
- 12) 白浜町誌編さん委員会 編 (1984)：『白浜町誌 本編 下巻一』白浜町 p803-p804
- 13) 紀州博物館学芸員、玉田伝一郎氏による
- 14) 高知県室戸警察署長 (1945)：『紀伊防備隊 (2) 施設及軍需品目録 日ノ御埼防備衛所及見張所』海軍省 p0186-p0190 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011206700

- 15) 対空用電波探信儀の場合、電波探信儀操作室は地下室もしくは半地下室であることが多い。これは当時のブラウン管モニターの輝度が低く、周囲を暗くする必要があったためである。
- 16) 作成者不明 (1945)：『近畿地区施設一覧 (附青図) (6)』海軍省 p0244-p0247 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011197600
- 17) 高知県室戸警察署長 (1945)：『紀伊防備隊 (2) 施設及軍需品目録 日ノ御埼防備衛所及見張所』海軍省 p0192-p0193 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011206700
- 18) 案内パネルによる
- 19) 高知県室戸警察署長 (1945)：『紀伊防備隊 (2) 施設及軍需品目録 日ノ御埼防備衛所及見張所』海軍省 p0195-p0197 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011206700
- 20) 作成者不明 (1945)：『近畿地区施設一覧 (附青図) (6)』海軍省 p0257-p0258 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011197600
- 21) 作成者不明 (1945)：『引渡関係図面 串空 (2)』海軍省 p0136-p0139 / 国立公文書館 アジア歴史資料センターレファレンスコードC08011421500

## 参考文献等

- 日置川町誌編さん委員会 編 (1996)：『日置川町誌 通史編 上巻』日置川町
- 由良町誌編集委員会 編 (1995)：『由良町誌 通史編 上巻』由良町
- 美浜町史編集委員会 編 (1991)：『美浜町史 下巻』美浜町
- 日高町誌編集委員会 編 (1977)：『日高町誌 下巻』日高町
- 白浜町誌編さん委員会 編 (1984)：『白浜町誌 本編 下巻一』白浜町
- 串本町史編さん委員会 編 (1995)：『串本町史 通史編』串本町
- 和歌山市史編纂委員会 編 (1990)：『和歌山市史 第3巻 近現代』和歌山市
- 和歌山県史編さん委員会 編 (1993)：『和歌山県史 近現代 二』和歌山県
- 財団法人 海軍歴史保存会 編 (1996)：『日本海軍史 第7巻』第一法規出版株式会社
- 日本海軍航空史編纂委員会 (代表 山本親雄) 編 (1969)：『日本海軍航空史 (3) 制度・技術篇』株式会社時事通信社
- 玉田伝一郎 (2004)：『平草原防空監視所 白浜戦争体験1』紀州博物館

"きとはんサーバー" <http://www.kitohan.sakuraweb.com/> (2019.08.12閲覧)

## 図の引用

国土地理院 地理院地図 (電子国土Web) の標準地図 (電子国土基本図 平成25年10月30日および平成26年4月1日提供開始) を元に地理院地図の作図・ファイル機能を用いて作成した。

## 謝 辞

本稿の作成にあたり、奈良大学文学部文化財学科 小林青樹教授には、終始懇親なるご指導を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。また、白浜の戦争遺跡の史料・資料を紀州博物館



学芸員 玉田伝一郎氏より提供して戴くとともに有益なご助言を賜りました。ここに、深く感謝の意を表します。

## Summary

In this paper, we focused on the remains of war that have been buried and forgotten in the middle and the south of Wakayama Prefecture.

A simple map was created based on the survey results.

Recognizing the current situation of the war ruins and the difficulty of preserving and utilizing them as cultural assets, we reconfirmed the importance of leaving the results of the survey as a print.

**Keywords** : War ruins, Wakayama Prefecture, Kii Peninsula, Imperial Japanese Navy



図1 和歌山県沿岸の戦争遺跡分布図



図2 紀中地区の戦争遺跡



図3 海軍日ノ御埼防備衛所・特設見張所跡地、初代紀伊日ノ御埼灯台跡地 遺跡概略図



図4 紀南地区の戦争遺跡



図5 臨海の家軍部隊跡地 遺跡概略図



図6 瀬戸崎防備衛所跡地 遺跡概略図



図7 市江崎特設見張所跡地 遺跡概略図

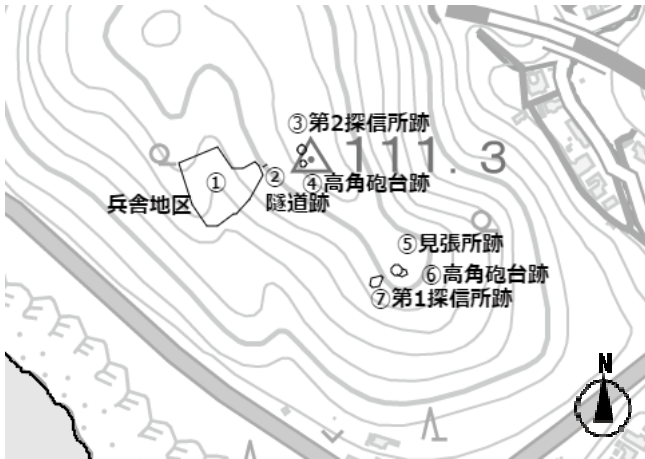


図8 江須崎特設見張所跡地 遺跡概略図



図9 潮岬特設見張所跡地 遺跡概略図



写真1 煙樹ヶ浜トーチカ跡 銃眼



写真2 高角砲台跡と砲座防護壁



写真3 初代紀伊日ノ御埼灯台の弾痕



写真4 崩落しつつある煉瓦塀



写真5 臨海の海軍部隊跡地の隧道



写真6 高角砲台跡の砲座防護壁



写真7 瀬戸崎 海底ケーブル支持金具



写真8 瀬戸崎 地下壕跡



写真9 市江崎 第2電波探信所跡



写真10 出土したベークライト板



写真11 出土したベークライト板



写真12 板の開口部に収まる可変抵抗器



写真13 江須崎特設見張所跡を示すパネル



写真14 高角砲台跡の壕口



写真15 江須崎 第1探信所跡



写真16 第1探信所跡の地下に遺る煉瓦壁



写真17 潮岬 1号電探跡



写真18 潮岬 海軍望楼跡の弾痕